

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
C-155	21-306	慶應義塾大学 加藤眞三
題名 (原題/訳)		
Alcohol and melatonin アルコールとメラトニン		
執筆者		
Natalia Kurhaluk ¹		
掲載誌		
Chronobiol Int. 2021 Jun;38(6):785-800. doi: 10.1080/07420528.2021.1899198.		
キーワード		PMID
アルコール依存症の発症、アルコール離脱症候群、クロノバイオロジー効果、概日リズム、肝臓の状態、メラトニン、ミトコンドリア、神経・精神障害		33761823
要 旨		
<p>ヒトにおけるアルコール依存症の病態をさまざまな方法で調査することにより、アルコール性心筋症、アルコール性高血圧、心臓・血管病変、アルコール性肝疾患、アルコール性膵炎などの代謝疾患、内分泌疾患、その他の病状の重要な生物学的因子が検出されやすくなっている。アルコール乱用は、神経系に障害をもたらし、アルコール性多発神経炎、精神病、アルコール性認知症などの神経・精神障害を引き起こす。アルコールは生物学的プロセスに対して時効性を持つため、アルコールの常用が人体に及ぼす有害作用の複雑さと多様性は、クロノバイオロジーの観点から考察することができる。メラトニンはリズム調節因子として、概日リズムの調節、体温調節、睡眠誘導、抗酸化、免疫調節、抗ストレスなど、幅広い作用を発揮する。本総説では、精神障害、睡眠と炎症、肝障害、ミトコンドリア機能などの観点から、アルコール中毒におけるメラトニンの影響を時空間学的な観点から紹介する。アルコール障害に対するメラトニンの主な臨床効果と、アルコール障害の治療法としての主なターゲットについて述べる。エタノールの時間生物学的効果は、特に発癌リスクと関連するメラトニン抑制と関連している。外因性メラトニンは、その抗酸化作用と抗炎症作用により、肝臓と免疫の保護剤として有望視されており、他の医薬品との併用により、アルコール性臓器障害の予防に有用であると考えられている。アルコール依存症の治療薬としてメラトニンに科学的関心が集まっている理由は明白で、メタボリックシンドロームを引き起こし、その後脂肪肝炎、肝線維症、肝硬変へと変化するこの病態の患者数が世界中で増加しているためである。メラトニンは抗酸化作用を発揮するだけでなく、肝疾患の管理に寄与する様々な作用を発揮する。本総説では、アルコール摂取によって引き起こされる正常なプロセスと病的なプロセスの相互作用、およびこれらの状態におけるアルコールとメラトニンの関係について論じている。</p>		